夢中 熱中 青春ライフ！ クローズアップ㉞

大館リコーダーコンソート

リコーダー（たて笛）、懐かしいですね。小・中学校のころ吹きましたよね。半音がうまく出せなくて苦労した人も多いと思います。

今回は、リコーダーの響きに魅せられ、十五世紀から十七世紀の音を追及し続けている「大館リコーダーコンソート」の佐藤孝弘さんにお話を伺いました。

左から佐藤、石田、戸枝、日下部さん

150㎝のリコーダーも

小・中学校で使っているたて笛の本物がリコーダーなんです。本物は木や象牙で作られていて、音域によって、ソプラノ、アルト、テナー、バスなど七種類あり、小さいのは十センチ、大きいのは百五十センチくらいのリコーダーもあるんですよ。

私たち四人が使っているリコーダーは、一本の楓の木から作られた物です。四本とも同じ材質なので音の響きが均質で、仲の良い兄弟のようなアンサンブル（合奏）ができるんです。

18年間続いています

昭和五十一年、大館コーロカンパネラの中のリコーダー好きの四人が集まって、吹き始めたのがきっかけなんです。

初めのころは遊びでやっていたんですが、昭和五十四年仙台で、ウィーンブロックフレーテアンサンブルを聴いて、リコーダーの音色の美しさと奥の深さに驚かされ、大館にも古楽の響きを復活させようじゃないかということで、本格的に始めたんです。それ以来、同じメンバーで十八年間続いています。

リコーダーはシンプルな楽器なので、音作りがすごく難しいんです。だけど、うまく音が出せると、まるでパイプオルガンのような響きになるんです。その響きを出せた時の感動を味わいたいためやっています。初めのころはたまに出せる程度だったんですが、ここ二、三年はかなりいい響きがだせるようになってきました。

古いので、かえって新鮮

二年に一回単独コンサートを行うほか、市内の教会や白百合ホームなどで、年に二、三回ミニコンサートも開いています。リコーダーが盛んだった十五世紀から十七世紀ころの、ルネッサンス音楽を中心に演奏するんですが、古い時代の音楽でしかも初めて聴く曲ばかりなので、かえって新鮮らしく、皆さんに喜ばれています。

長年の練習の成果が実り、アマチュア音楽家にとっては憧れの「カザルスホール第七回アマチュア室内楽フェスティバル」への出場が決まって、みんな張りきっています。

杉並区発➡大館着

前略 大館市民になりました㉟

☆今回は中神明町の渡辺康さんご一家です。

Q・ご家族は何人ですか？

妻の洋子と二人です。

Q・どちらからおいでになりましたか？

大館で暮らしたくて、去年の四月、東京からUターンしてきました。妻は福井県出身です。

Q・大館の印象はいかがですか？

夫と一緒に初めて大館に来た時、田んぼや畑が広いのでびっくりしました。福井の田んぼや畑は狭いんです。雪の量は福井の方がずっと多いんですが、寒さはこっちの方がきびしいですね。

Q・食べ物や言葉はどうですか？

お義母さんが作ってくれた「きりたんぽ」を食べて、おいしいなと思いました。特に、セリにこんな食べ方があるのかと驚きました。福井でも東京でも、セリはあまり売ってなかったので、食べたことがなかったんです。水もおいしいですね。東京の水は臭くて飲めませんでした。言葉はだいぶ慣れました。夫の「はり・灸」治療院を手伝っているんですが、最初のころは、患者さんの電話の内容が聞きとれなくて、困った事もありました。

Q・大館にどんなことを望みますか？

近所に雪捨て場がほしいです。福井では家のそばに水路があったので、簡単に雪を捨てることができました。そんな水路があればいいと思います。

康さんと奥さんの洋子さん